

物部古郎

拾

^13
4269
10



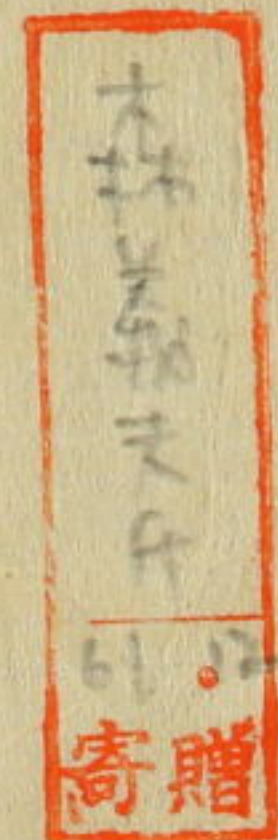
物草太郎卷之拾

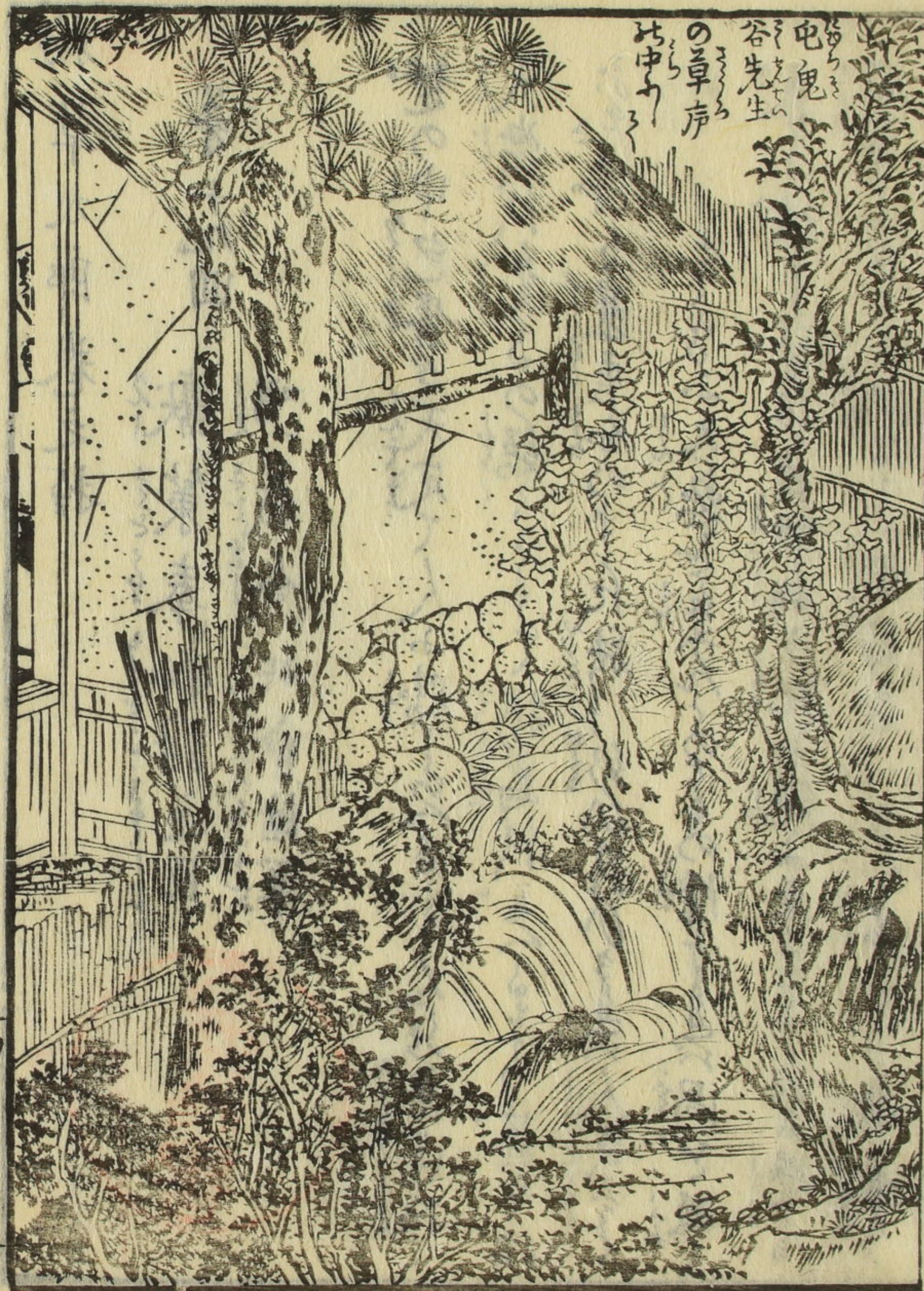
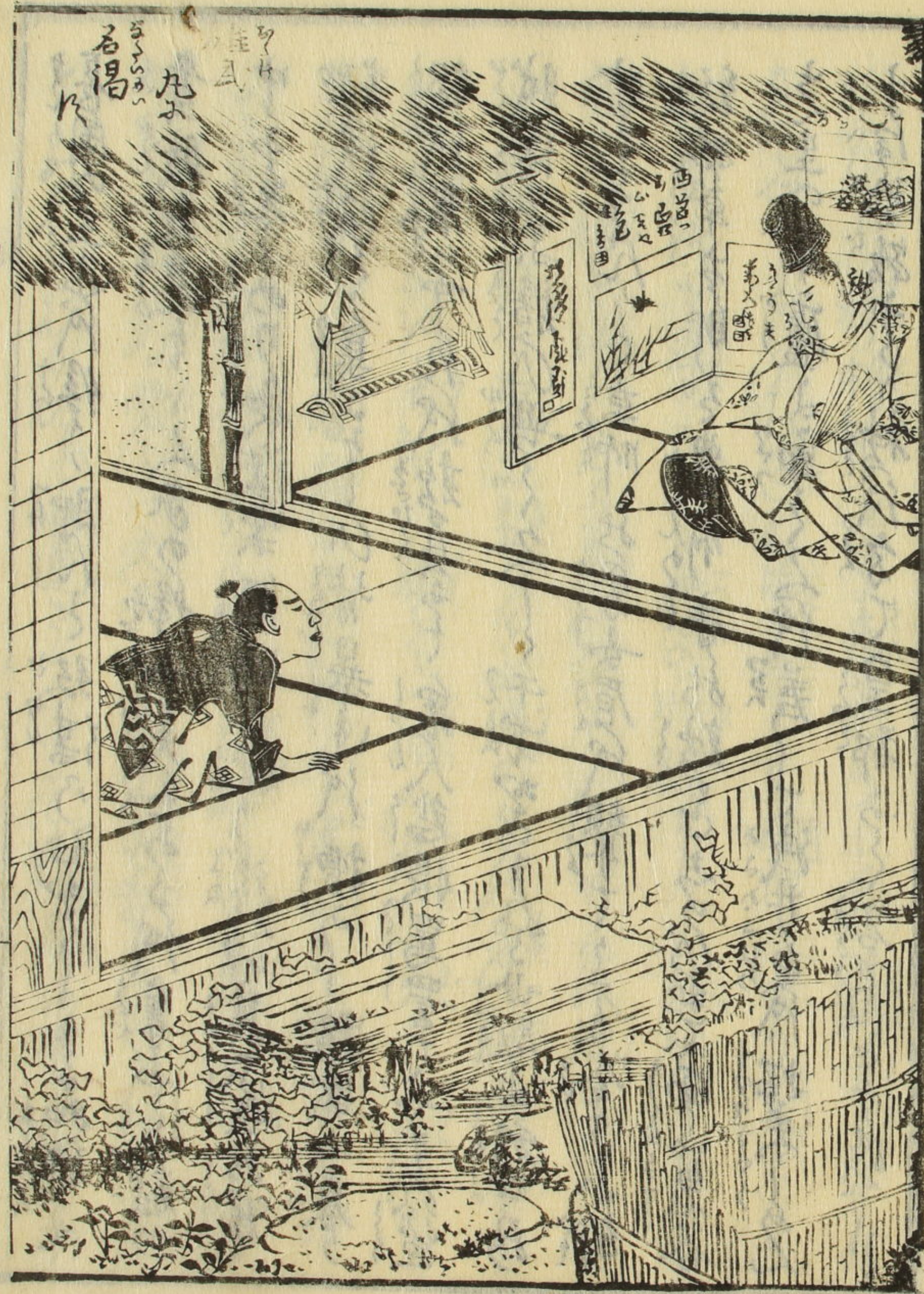
第十九回

獻策奉勅討逆臣
唱義合兵會諸軍



楚の申包胥が天定て人々勝るとも人々敗るとも天怒ば受るの照くとして揚鳥代まるとなり箇や治
みたる所と暴聖公のやん施し給ひ給ひる人民を
非ざる事とてつる小天怒と受んるの隆をまび圖と改て
善く復しなむら祖廟の祀と絶よ至るまでなせし
改なりしをてく尚しむの望蜀がけくん事とても後奉り





物草十ノ壹

長岡の王子が修し即んと強謀の心を加へ
貴賤を遷り一人家の婦女美をある代奪り
中を元しめり夜淫楽酒興を耽り
類代以て集りて皆暴達代擅り
弱代虐り中代欺負りて衆人怨恨罵詈
賦諸方小獲の興く久しく干戈を
中しあらんし京師に男女眉代擧て
玩物卓を即ち豊前守に致し
之生の草廬よあらん代弄りて
と浮城路あり社代方て皇都あり
名濁さを及べり

物草十一

好むひ一稗刺那もやま志を
是て心より及べりて
奮盟代も尋ねて
中子の使を洋くちあ喜び
八雲代もく西のよ来り
屯が来り代告知り
やう這里し一客廂あ
いざしてうまよ冠冠
ひやうもあぬ堂一丈夫
やぬくねがひ一也違

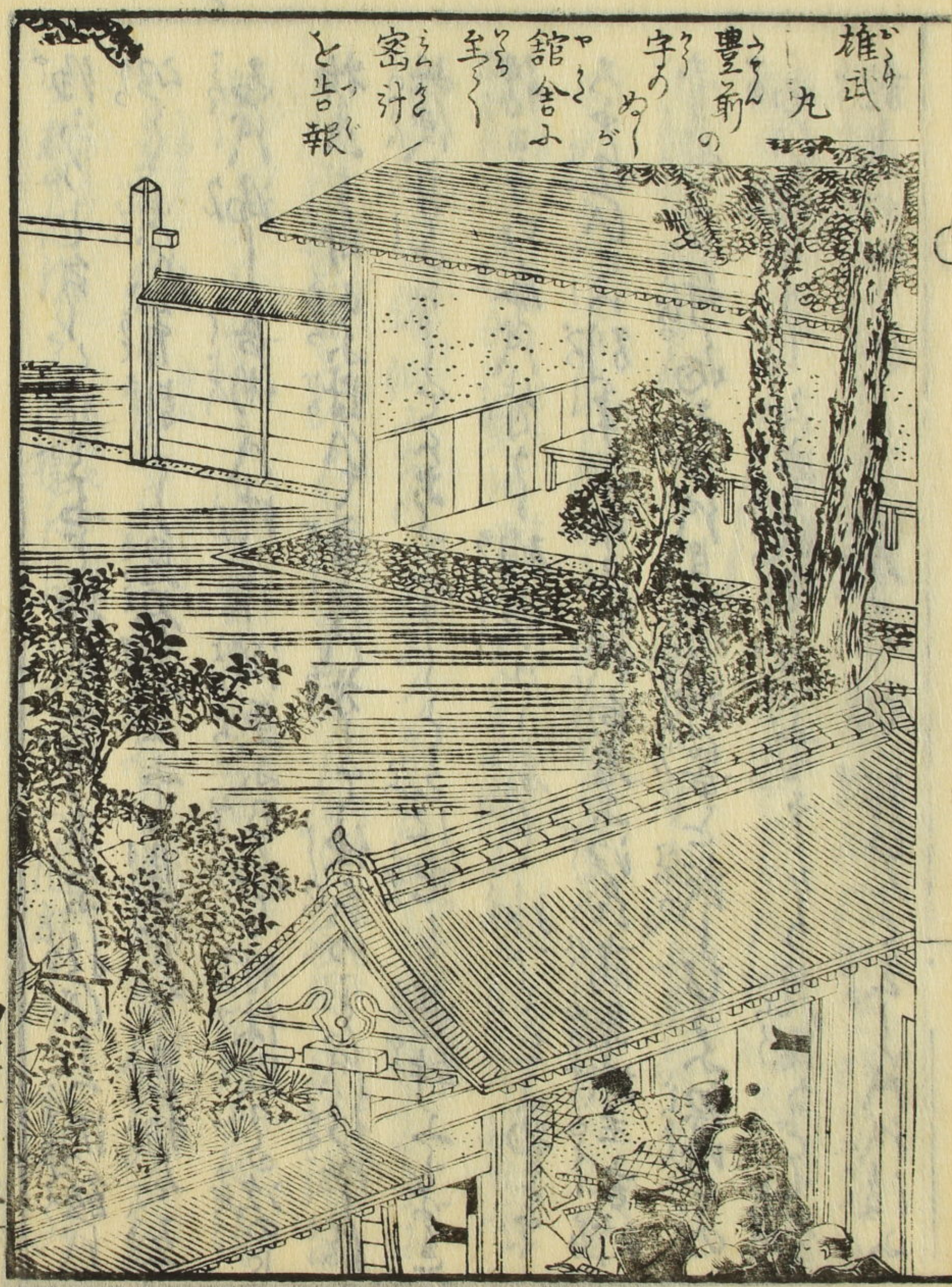
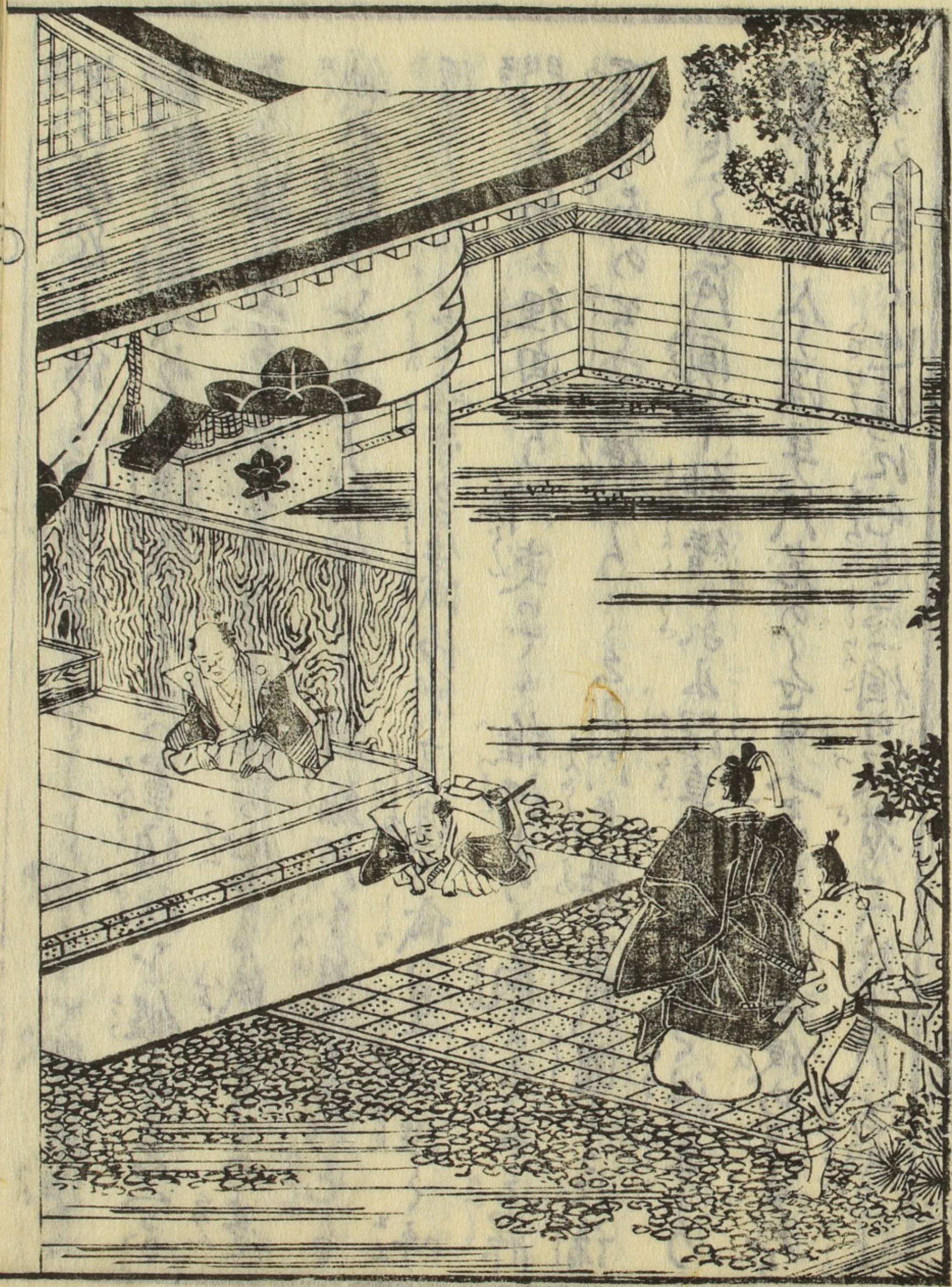
物草吉郎を中務隨所より駕代に奉りし事ありて
あつたにやまゝに多岐の由も賜望さるるありしに
法後して傳へしあり凡そなほさるるありしに
貴子ももつてさるるふ人ありしにさるる名も
せ給ひてさるるふ物草吉郎を駕代に奉りて我も
り急しあるに始めりし事ありて揚美忠臣と
いふに明くもあつたに其時名傳へしにさるる
しり吉子妹子側よありしに津守人よりさるる
てさるる人今も何れも隠しんれに浮草中將の
乳名雄武丸なりしに一年代十三歳ありて是に
先

物草十三

北畠山彦の兩郷を代合せに後代に攻んとす
しるるを此の如く其事存存の方少候とす
く免兩郷多し虜とあつたに其れ代一軍
書く討めと引け言或し運つた力強しは肝と
ぶらんとの方と杖く事待わがうく翻思ひ
男し一生を難くもの古人は確言何れもさるる
てんともを斬めけ皇宮小堀入て三品の神宝の
一個天村雲神器とも獲りしに密に事聞かすに信
明流すの邪を信成とすに教態お早とすに
假し士人の剛愎と杖し何れも言代観ひて味方

拈れ集るところは佐加新野左邊の村佐ねを始とて
武士都々六十人血をすつて團をりん神清家の房係
大納言有季御りるべ化を敷く甲軍人兵馬糧食已り
是れを道に引らば我兵と争んてさるより吾子も先登
みせく主家の寛代雪のまよの時より目々拈れ呼
りたりと備細みよのころありきも屯を雀躍してさふ
ころへは慈眉をひく時より一傳も西國へ或技試比の
事しつりともりりも実を力士濱海人のぞれた成得
てさる君の備と報介の望でのまわく其意へ金銀のぞれ
士殺千個沈くころ檄成飛して拈る隨即さうり登んとの

物ありとさくわくも物草を所もさ拈びまづ酒飯
ひく中成管敷く鬼谷先生も是こそ其世を互
も成海へ吾例成法へ深更なるんで皆休歇する次の
物草を即ちお對ひて吾子成方して使家のころ成拈れ
此使吾子よりしてさあつてさるに屯を甚幹よもさ
傳る子の命成背り確志より一處へ移してさる物草を
さる收びこの別事さるべ成向者よは高島城主吉竹
喜成より奇物あり成見と神聖と戴しひふ忽地その
病の症さるる喜成守さるさる老臣さるもさ
記集の物りひさる厚く成報いんとて成成後さ



雄武たけむら 丸まる
 豊前とよみ の
 字あざ の ぬぬ が
 ヤや 館かん 舎しゃ ふ
 至いた り
 密ひそ 計けい
 と 告つ 報ほう

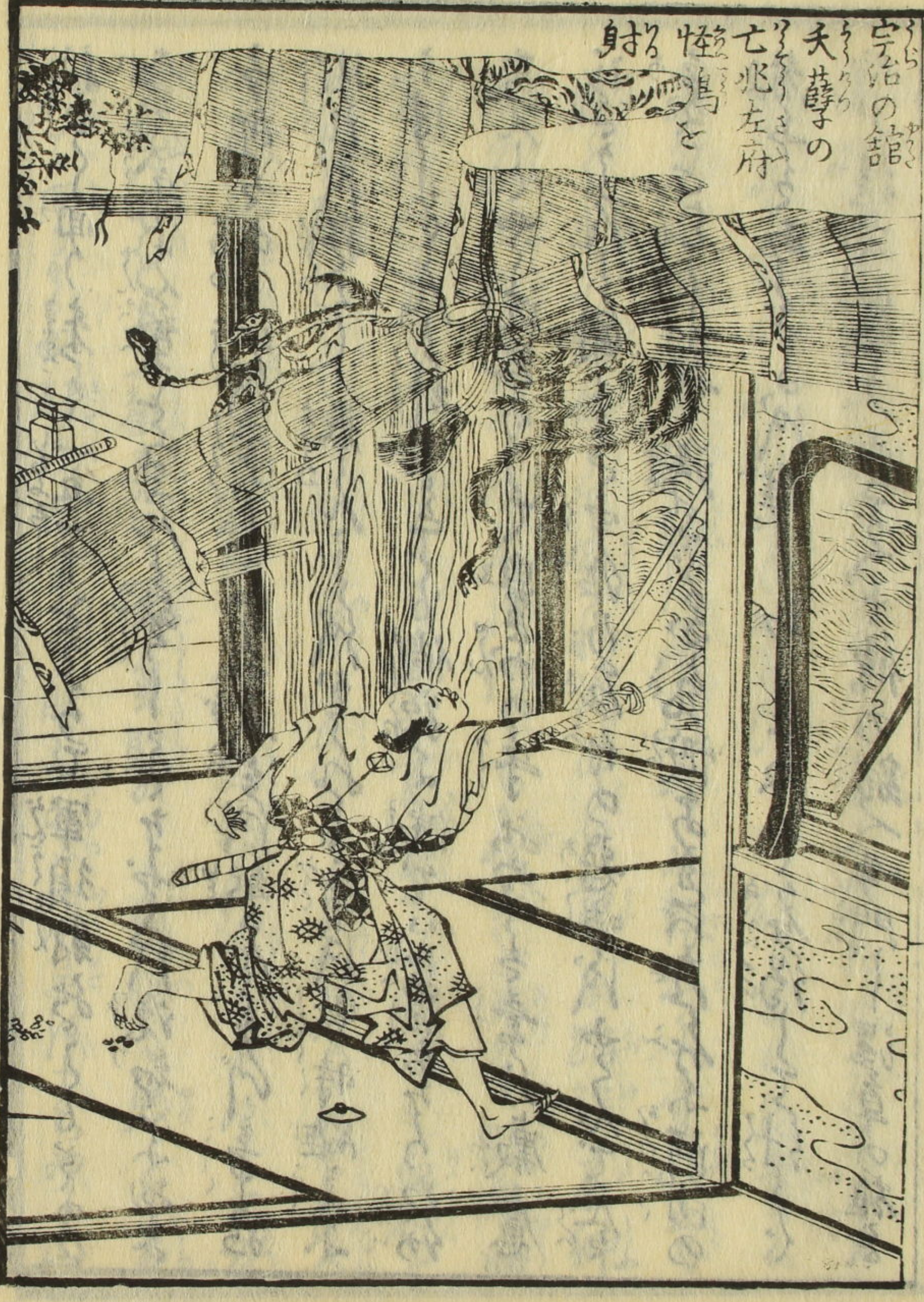
物草ものくさ 十ノ五

抱じだれたるゆゑに海ひあやしくと約しと取ぬ準を
富饒の真への諸侯をいふ軍須財と假んとも之を
をり機と空しくふるお應じ準心をも試しとこのまを
油小血押ととくしむらりと詳細にわたり多しとて
後より吉作壹岐守が屋敷に州高嶋の城へ星夜往り呼
門とるあは裡面より門吏にて誰何よりと向しととる
深井家の女子の使をりともよ門吏共く成通とりに諸
老長とて月圓く紳縉家も深草ととるまを姓年より
唐とく今深草代名のせめふまへたれし使のこころ
半のまをとて運接にとと只一個の役者とくははは言聞の上

小のくを怪しむるふはまをくと白代と揚を付く臣淺
井屯とてこのりり今なありて暫く深草雄武丸とて
来りたるまを深草中將の令郎とて姓年亦雅とて
と國子仕り代帝月初ありて深草のひめとて討同ら
とてたさ向者お相との物草を即か思代交すひく厚く
概んと約しとひはるまのありけりともいふも其年
ゆきと對しとて事ば何れもあは望しとてあは活ひの
や同くあまの盟約言代食の理とてとてふとてこの
まをんと深草より一個の表油とてりり物草を即か
假の傳名是即雄武丸とてりり此も相との血押代賜りて

後世に於ては、同くやんともふ老后吃一孫、
樂事等の祝歌、
子々んともや、詳細代臺、
聴くもふ對面、
清家而餘、
軍代こさん、
かゝ我とも、
の高義兵、
きこば中、
別て聞、

行さく、
音及身、
古所、
御代、
うけ、
あんと、
河、
多、
者、
や、
後、



宇治の館
天藤の
七兆左府
怪鳥を
射

物語十八

ぬわりのわし不達すらあ拙だれも何うもまうゆふ
やとせでるふに世々あること他まじひく澤州あを終く
かへりしあ何人かして近接ふ業業の中より名村印さ
美少年其業のそく弱も満るふ澤子乃おとく後と
堂ふおのくおふ拙く豊永年ゆへみえさいうけ
貴介のふみあるやと討問ふ物事を所十と果めくれ
官中ふ理入く宝器は奪ひ終る乃と家又隠きの
びく新聴くものゆりく嚮ふ清水かき入ま
と弱るやいふた行もあ慮ゆりほよよわ代幼終と
四下ふ人代出くお徳くむ倚悟らとよバ要業をり終て

五十一

渠氏欺んと討較ふちあ府か令まのそとと人あ
強くくも代幣とく同く代計をにゆりく清水扱
香のまを圓うく拙り後と目り子待事居くらふ
働くあの下刻くあがらよる業後者多く志とま
おひくこと強しうかか一個を代親のそとと
て學が教ひをと教でんを先たり二個より渠をれと圓
ばかーいん業と思ふ乃ゆ代とゆれべしと親類子小
おるこれく族學くして渠が而と拒め群あるあしとけ
つくとく一の半つくと備細は張流けりうあよゆ
物事を所が好澤と却く才後とてとの愚やまらうゆ

ついでに物草を即の楓願子とて告別してきつり細く
豊をのち手を入朝して帝を自らより愛す雄武丸がまはせ
後頼後下詳細は奉願をうらふふ帝天気がうりて雄
武丸が神器乃匣に記や一七絶の清代をりかきせ給ひ
深く其力方と感ドうて給ひ後ふまえて石屋の族
代殊一とまらぬ流代はるるの宣るともいぬる
いそをあると字よりかきぬ所たと給へ是朝と給ふ
隨即雄武丸と給へ宣る代進る一肉勅のこころも

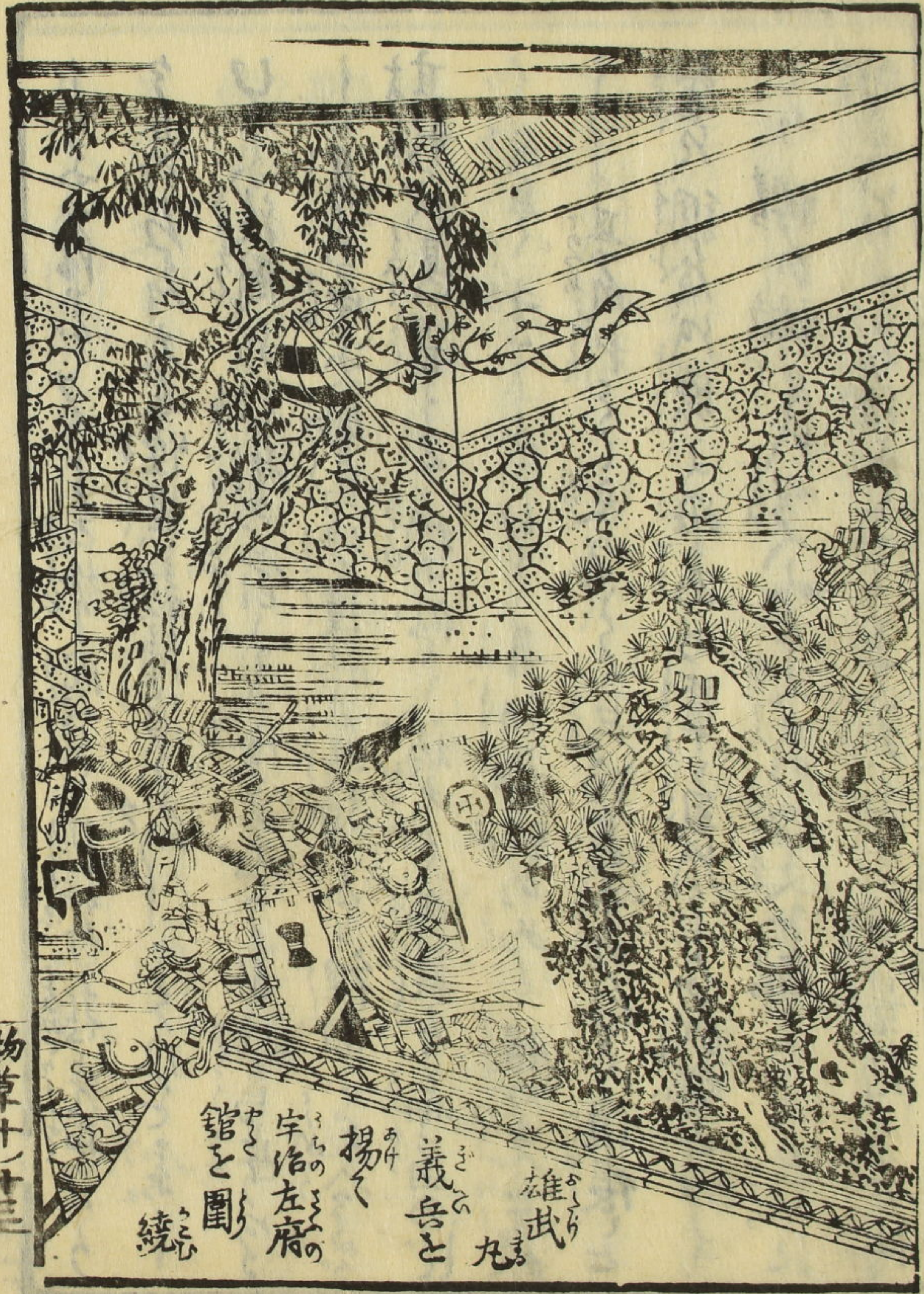
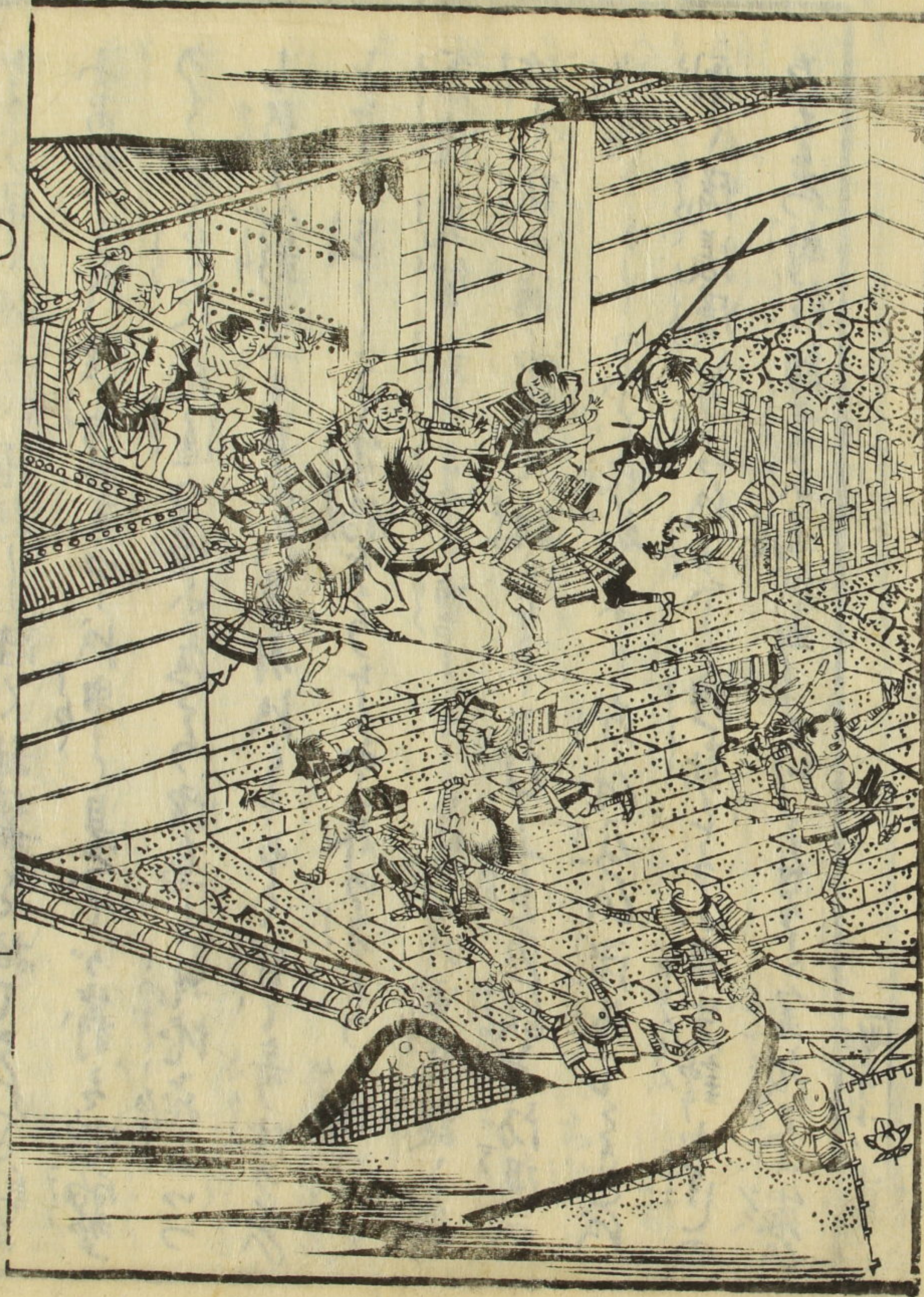
けはれ小雄武丸を宣る代が戴てまうとて給へ軍令
と諸國をめぐり日代刻て兵隊集るる東國より信州
の住人新野を湯門尉信頼江別に住人吉竹を重取とて
耶と給めしてまのびくふよとて料と給ふとて依又
西國の諸侯を大坂依見ふ馳参るる小雄武丸は浅井氏に
てして法周の軍を代嫡ひ相代暗歸ふ旗幟と達て
應接乃執ひとまのびく一令專其準備とて依

第二十四回

動戈干群克伏誅
乘弓矢旧臣復位

却死豊本寺を朝見して雄武九が密計を奏し
多摩の御馬代に下りて嶮我を微行せしむる
雄武九は慥共古處お身と拵し密に御馬を
下しより行り嶮我乃離宮お入御し
の左府長岡の王子さるるぬ就鳥の威勢に濟ま
に我意は違ふのゆゑに傲意懈し日夜酒
耽りては荒るる不日百官を朝見し時々の威
試しく倘我は背くものゆゑ盡く害殺し帝を
んと毒ありしが皆を討死せしめり
まゝの酒ありてゆりたるお園中の樹を盡せし

らふはむしと云々其聲甚き
くはるるお園鳥の聲は
しる後園お樹の影に
しる見ざるお園鳥の聲は
其形状甚異しと似く
く尾を千てふしけく其
其利は刃の如く只い
翠の綱を破壊し雄武
てお轉の体は以て
おとらるるお園を



物草十三

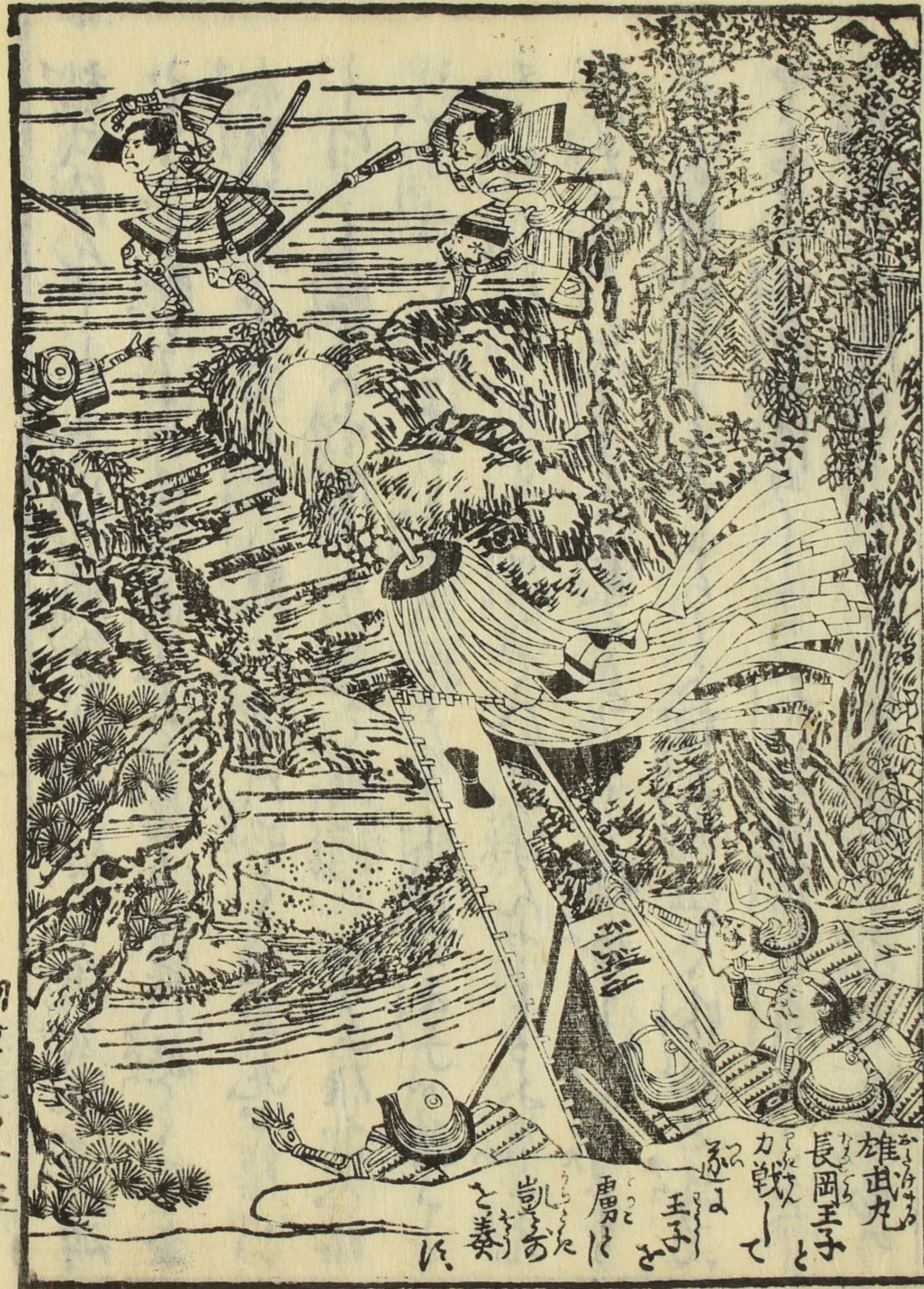
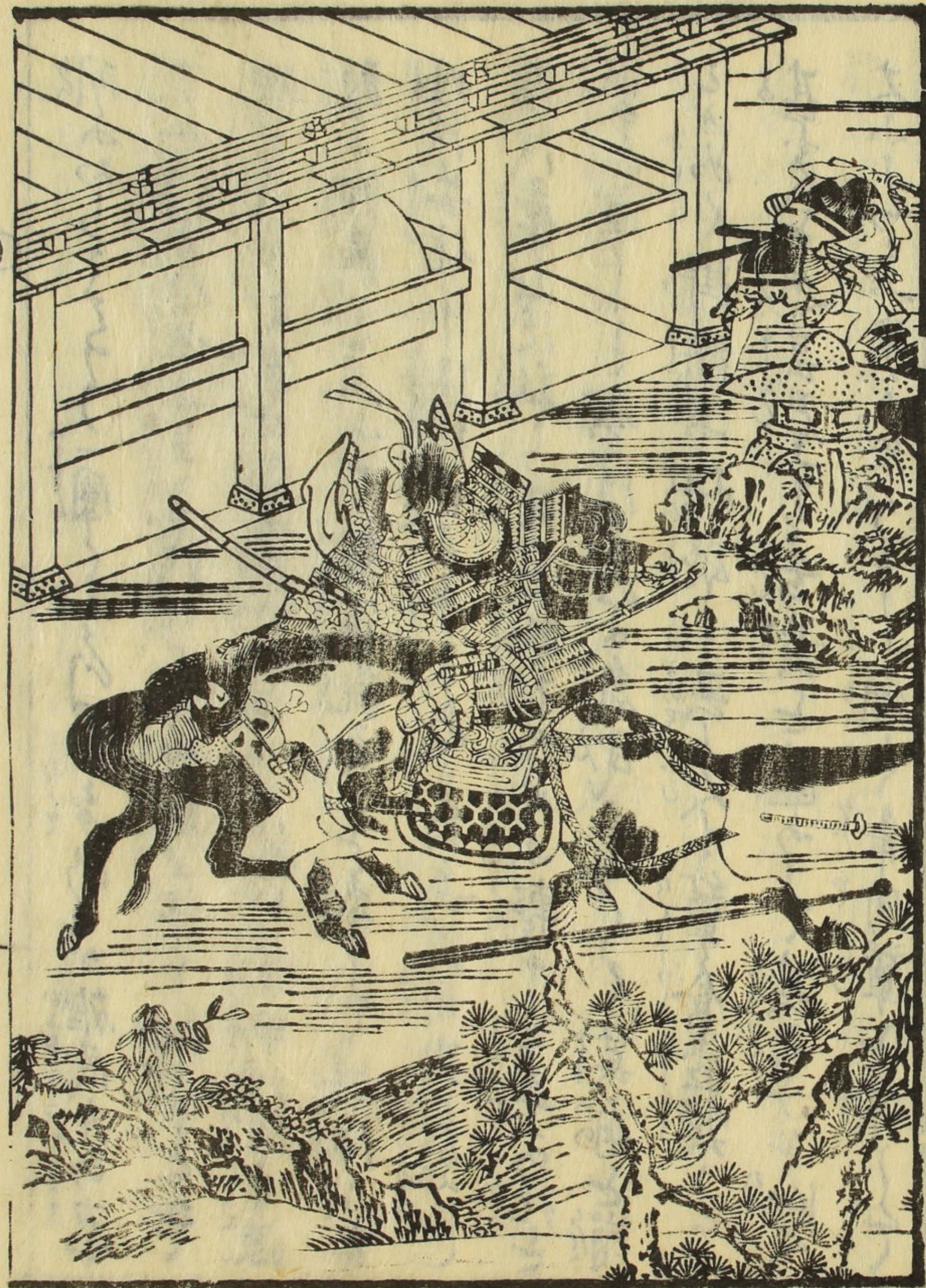
雄武たけむら 義兵とよしいへ 揚あ 宇治左府うじさふ 館と圍たて 繞めぐ

けうく早く硬弓張起し強く神箭と抽てこれと射
ふあやまらん怪鳥の直中矢串し是く一が箭と臆的夢
のうして空た飛遠の地ふ居るり怪鳥と就地飛去つづ
らゆらん影だふも見之ん在存以くどめく皆く奇怪のふ
とけー一筆くく守的どうくまの外の方より一個の小吏
倉惶氣質走りまわく稟くく一敷万れ軍馬鼓と圍
住く城の通ふたれ路もくくさむふたれ欲と防限の
準備くく一之と報知ふそた付らび渚長下るる日
剛く慌慌智上ふくく一と強勁くくふ早先鋒めくじの
た古歩射候頼首ふ馬瓜出してかまをく。金鼓天又震ひ

喊声地瓜動ふ小籠の中より不破大進馬瓜乗り後
頼不動まてくくふに信頼馬瓜更へかひ令く剛く二十余
合信頼破後と責て怖くまふ大進のくく一と追討
と馬と圓して勢方大進が頂門と斬はるるに大進
瓜懸るる馬瓜のく首瓜吹下小馬と音即様飛く作
くふよ大進忽地焼く地りふまら瓜ま卒あつらるる
ふ御傳く唐く人守居るれ兵ま々大進が唐くくふと
見くくふふ影まてくくたを付くも軍利あまふと
慮て肉を味入くくめくくかめれた吐瓜破くあ
くおん名瓜情くく我と憶ふの徒まのくくひの自屠く

河内にて日一戦ありたり其餘の諸軍を各處
に逐ひ去りて逃遁するは佐野に於て法皇と号
し使と中軍を馳せ雄武丸を捷音と報せられたるに
長岡へ向ひて吉竹壹波守に一搭見ゆらぐ出陣し凱
歌を奏せりて諸軍は頷して長岡の郷に至る
此の吉竹壹波守先鋒を爲す王子と抵敵し王子
が力なきに強敵として吉竹が兵士を損傷し王子
宗伯の勢を向く一宿軍の軍士も長岡まで接
駟せられたる吉竹壹波守より一戦王子を虜にせし諸
軍士の秋と丈夫をいふもさかしく嘆んたりと記す

二尺寸のきかしの輪起して人達人死馬遇馬死に敵兵と
さく見し一虜に王子を虜にせし大八點銅鎧と使記
て壹波守は目撃し撃てうらふ吉竹壹波守王子と二
人合戦しども争ぐ王子の饒勇に相争ひたらず
戦し馬を相く引退ふ王子追趕しと大八點銅鎧
はうくと使記難でまらるる家も一條の鳥籠はと
海に擲るる難なき吉竹が一枚の人馬を馳せ
して其隊を和して己を危るる際雄武丸中軍を
ありてその光景として後軍を指揮して壹波守と
馬に進め剣戟と相争ひ敵兵を衝崩し王子の兵



雄武丸
 長岡王子
 力戦して
 遂に
 王
 虜に
 凱
 と
 奏
 へ

物
 京
 一
 二

身代責む暎石明く忠良に因りあつたこのまふ
四長ふ聖徳やうくあひ天影を拝しあふ涙
こころびのあふ雄武丸が忠勇を今にたがへた
まゝくゆめ中将のうらびあふゆき
久しれ又子の會面ようらびの涙
廷の政田ふ後と忠良の官半代とらひ申す
五長十兩の聖代作らぬまふもさうり
が響ふ歌と詠んがめ豊前守が姐と嚇し
圓くを流し雄武丸のあふゆき
のあふ涙あつて姐と接抱し今もあふ涙のあふ計

加筆十二

増殖のうらむ良縁を結しあふと勅しゆへ
こころを六隨那赤繩のこころ洞の雄武姐
歸む此うらむ兩個の思愛如膠似漆して
孫繩くやうてん絶家富榮うらむ雄武丸
町百姓の目も酒食長あつて追思しあふ
如き女心ありあふ希ふ奉てあふ寺ふ
えんと準備はあふ懸念あふの役者
信長にゆきあふ新野左馬の尉あふ
て銘に拮据雄武たをさう
那の百姓はあふ能く射とあふ酒を賜り

て鶴代はささむ百姓頭を町々其恩賜と拝謝し伺
て若光寺に控へ一七日の法會法をて左府に成亡
かや後のはふ佛堂を以て導師の悟道作と清く其
莊嚴つたやうもゆへに天女死代雨一善法事迎極業
淨土九品蓮華をり伴相もくやと貴賤も推武丸が他代
報り徳とゆへにその若根と感入る後推武丸を後
れに徳とゆへにして帝都に登り淨土の人全雁よありと
くもさ後々山笠の雪ふとや相もあの困窮と云へ
白糸の糸流流のくみ世情お流し鬼谷先生悟道作
の庵おはまへて自ら治世の徳更や辨くむの由

物草七

お世代中々々衆々壽百歳おまゝく人同代きく遊を
終ふ形人推却丸々多質明神の化身推却丸々法井
権現乃の化身やまゝ一ゆもあはくやさ凡人おてま
はるさごまを

物草右郎卷之拾 大尾畢

京師畫工合川珉和



剖劂

壹三四五七八九之卷

林

清兵衛

二六拾之卷

丹羽庄三郎

文化五年^{戊辰}八月刻或

皇都書林

物草十三三

和漢
西洋
書籍
賣捌處

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋
岡田茂兵衛

